2021年9月26日（日）主日朝礼拝説教

『そばを通り過ぎる主』井上隆晶牧師
ヤコブ4章1～4節、マルコ6章38～52節

❶【そばを通り過ぎようとされる主イエス】
今日はまず、イエス様が湖の上を歩かれた話からしましょう。イエス様は弟子たちを強制的に船に乗せ、湖の向こう岸に行かせます。そしてその間に群衆を解散させ、一人で祈るために山に行かれました。強制的に弟子たちを船に乗せたのは、群衆から引き離す為でしょう。群衆と弟子たちはパンの奇跡で興奮し気持ちが大きくなっていました。このままでは彼らはイエス様を王様にしようと運動するかもしれません。イエス様さえいたら豊かな生活が送れると思っています。しかしそれは「**主の名をみだりに唱えてはならない**」（出エジプト20：7）という十戒を犯すことになります。この戒めは神を利用するなという意味です。彼らは自分の欲望を満たす為にイエス様を利用しているだけで、神に仕えていません。そこで彼らに利用されないために、一人で山に行かれたのです。そして弟子たちは訓練するために湖の中に送り出したのです。
夕方になると彼らの乗った船は湖の真ん中に来ていましたが、風向きが変わったので逆風になり、弟子たちは前に進むことが出来なくなり、一晩中、湖の真ん中を漂います。湖の上は真っ暗です。その闇の中を強風が吹いています。風が強ければ波は高くなり、舟は大きく揺れ、転覆する可能性が高くなります。弟子たちは必死に船のへりにしがみつき、死の恐怖を味わったと思います。その様子を山の上からイエス様は見ておられました。そして夜明けごろ、山を降りて湖の上を歩き弟子たちの船に近づいて行かれました。しかし「**そばを通り過ぎようとされた**」（48節）と書かれています。なぜすぐに船に乗り込まなかったのでしょう。弟子たちはイエス様を幽霊だと思い、恐れて大声で叫びます。死の遣いの亡霊が自分たちを水の中に引きずり込むためにやってきたと思ったようです。ユダヤ人は水を怖がりました。ノアの洪水も紅海でエジプト軍を滅ぼしたのもすべて水であり、水の中には巨大な竜、悪魔が住んでいると思っていました。水は死の世界の象徴だったのです。するとイエス様はすぐに彼らと話し始め「**安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。**」（50節）と言われ、イエス様が船に乗り込まれると、風は静かになりました。
この物語で船は教会を意味し、湖はこの世を象徴しています。逆風は神に逆らうこの世の悪霊の象徴です。キリストを自分に従わせようという自分中心な信仰をしていると、目的地である神の国にたどり着くことはできないばかりか、この世を漂い、悪霊から来る恐れという波に飲み込まれるでしょう。湖の上を歩くキリストは死と恐れを支配する復活の主のイメージです。キリストが幽霊のようにぼーっと霞んでしか見えなくなったなら聖書を読みなさい。キリストと対話をしなさい。キリストを王として自分の中に迎え入れなさい。そうすれば恐れはなくな

り心は穏やかになるでしょう。もともと人間は神に向かって生き、神を宿して生きるように創造されているからです。神があなたの中に住まわないなら、あなたは決して平安を得ることはできないでしょう。もしかしたらイエス様は何度もあなたの中に入ろうとそばまで来ておられるのかもしれません。でもあなたはそれに気がつきません。自分の事ばかりを考えているからです。パウロも「**他の人は皆、イエス・キリストのことではなく、自分の事を追い求めています。**」（フィリピ 2：21）と嘆いています。キリストはあなたに何度も手を伸ばしておられます。「**私は不従順で反抗する民に、一日中、手を差し伸べた**」（ローマ 10：21）と書いてあるからです。でも、あなたはキリストに手を伸ばしません。キリスト中心の信仰をしなさい、彼に仕えなさい。
弟子たちは「**パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。**」（52 節）という言葉でこの物語は終わっています。ということは五千人の給食の物語と湖の上を歩く物語は一つの話だということになります。五千人の給食の話を私たちはどう理解したらよいのでしょう。

❷【万物を神にお返しし、祝福してもらって、受け取ること】
この 5000 人（女性を含めると 1 万人以上）に五つのパンと二匹の魚を配り、満腹させる物語は皆さんも何度も聞いた話だと思います。これを読むと、どうやってイエス様はパンを増やしたんだろう、という所に関心が行ってしまうのですけれども、聖書はそのことについては何も書いていません。と、いうことはそれについて考えなくて良いということです。私が目に留まるのは「**取る**」「**祈り**」「**裂く**」「**配る**」という一連の動作の言葉です。これは聖餐式の言葉と同じです。「**イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。**」（マルコ 14：22）ここにヒントがあります。この四つの動作をあなたはしているかが問われているのです。
（Ⅰ）まず「五つのパンと二匹の魚」をキリストに渡し、彼の手の中で祝福してもらうことです。つまりあなたに与えられたものをまず神にお返し、祝福してもらうのです。なぜ教会で結婚するかは、神に祝福してもらうためです。神に祝福してもらわなければ人間の手でいくら結婚しても祝福されません。お給料もまずキリストにお返しし、祝福してもらうのです。あなたは 7 日与えられました。その七分の一である日曜日を神に返しなさい。そうすれば他の六日も祝福されるでしょう。万物も、子供も、自分自身も神に返さなければ祝福されません。現代人はそれをしなくなりました。人間は神に万物を返さなくなりました。
万物を回すように人間は管理者としての務めを委ねられました。ところが人間は万物を回さなくなりました。与えられたものを神にお返しすることをせず、自分の所で蓄えました。恐れたからです。そこで万物は腐り、呪われたのです。世界では食料生産量の 3 分の 1 に当たる約 13 億トンの食料が毎年廃棄されています。そして世界では 9 人に一人が栄養不足になっています。必要なものは十分にあるのに、回さないので人を満たすことが出来ないのです。万物のサイクルの中に神

キリストを入れるのです。キリストの手元に戻ったパンと魚は、キリストの手によって祝福され、人を満たす祝福されたパンと魚となりました。キリストに捧げられたパンとぶどう酒はキリストの体と血に聖変化し、私たちに真の命を与える真の食べ物、飲み物になりました。だから修道院ではすべてのものを祝福します。食べ物を祝福し、住まいを祝福し、仕事を祝福し、人を祝福します。**すべてに「神」をつけてゆくのです。祈られたものはすべて聖となり祝福されたものとなります。**

（Ⅱ）その次に大事なのは、キリストの手から祝福されたものを、それがどんなものであっても素直に感謝して受け取ることです。ヤコブは手紙の中で「**得られないのは、願い求めないからで、願い求めても与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです。**」（ヤコブ 4：2～3）と書いています。一生懸命願っても与えられないのは、自分の欲望を満たすために求めているからです。「願い求める」とは、自分の欲しい物を求めることではなく、神が下さるものを求め、与えられたもので満足することです。自分の思い通りにしようとする心ではなく、神の御心に従うことです。残ったパン屑と魚の残りを集めると 12 の籠にいっぱいになりました。人間は自分に必要がなければ「屑」にしますが、神にとってご自分が創造された物に「要らないもの」はなく、この世に「屑」など存在しないのです。すべては神が祝福したものなのですから、神の手から与えられるもので満足しなさい。それは「屑」ではありません。

●先日 TV 番組で武田鉄矢の遠い親戚に、江戸時代の三浦梅園という哲学者がいるとことを伝えていました。本職は医者なんですが湯川秀樹に影響を与えた人でもあります。自然にものすごく関心を寄せ「条理学」という哲学を唱えました。「自然哲学論集」という本を出しています。彼は子どもの頃から自然に興味を持ち、なぜ石は下に落ちるのか、なぜ太陽は東から出るのか、などの問いを大人たちに投げかけ、変わった子だと言われてきました。彼がこんなことを言っています。「自然は、わがままを主張せず、天に従って生きているので調和があるが、人間は自分勝手に主張するのでまとまりがつかない」本当にその通りだと思います。

イエス様は、空の鳥を見なさい。彼らは倉に入れて蓄えることをしないが、毎日神様から必要な食べ物を貰って生きているではないか、と言われました。彼らは決して文句を言わず、主張せず、自分の分際を守って生きており、自然は調和をもって回っているのです。しかし人間は自分の分際を忘れて神のようになり、与えられたものを満足せず、すぐに不平をいい、周りの人と争い、計算しては不安になって蓄え、回すことをしません。神を信頼しない、神に委ねない、自分中心に生きている、そこにこそ大問題があるのです。神にすべてをお返しすること、神が下さるものは何であっても祝福された善いものであることを信じ、素直に受け入れて行くことをしていきたいと思います。呪いのサイクルではなく、祝福のサイクルにあなたも入りましょう。